

# 特集 2009をふり返って



昨年、札幌市円山動物園で行った「しっぽの会チャリティイベント」。トークゲストのカメラマン服部貴康氏・タレントの坂上華奈さん・当会代表稻垣真紀の三方に、昨年でも最も印象に残った出来事や想いを寄せていただきました。服部氏はカメラマンジャーナリストで、「ただのいぬ。」プロジェクトの主宰として精力的に活動されています。また、坂上華奈さんはタレントとしてご活躍の一方で、ペットグッズ「MOBBY」のオーナーであり、動物の愛護に大変熱心な方です。当会稻垣代表のコメントも合わせどうぞご一読ください。いろいろな想いが交錯した2009年。少しづつではありますが、一步前進出来た一年だったのではないでしょうか。今年も「人と動物の共生について、一人一人の意識が高まる」そんな一年にしていきましょう。



## 報道の壁をこえて

**坂上華奈 ペットグッズオンラインショップMOBBYオーナー、タレント、幼少の頃から猫などの動物に囲まれて過ごしていたため動物が大好き。**  
8年前に初めてペットショップにてキャットフードを購入。犬にどっぷりはまつた結果、動物界の裏側を知らしめらる。「しっぽの会」のお手伝いをさせてもらい、そのテーマ「わたしたちのできること。」をスローガンとし、少しでも不幸な動物が減るため、日々活動。現在、愛犬のしつけと格闘中。  
<http://www.mobby.jp/about-mobby.html>

▼2009年印象に残った出来事（犬猫編）・・・う～む、去年何あったかしら～？と、もうすでに記憶に薄れてる2009年。最近の事しか覚えていない・・・で、つい最近の出来事なのですが、本業（？）の芸人の方で先日、東京にて「まちゃまちゃ」とトークライブをやらせていただきました。もちろん「お笑い」のトー克拉イブなので「お笑い」な話をメインに喋るわけですが、「まちゃ」と「自分」についてのお話もするわけですね。そこでのワンシーン。「北海道に“しっぽの会”と言う会があります。～省略～そこシェルターでは過去、すんごい数のワンニャンを里子に出しております。で、その一時預かりの際、わんにゃんに仮の名前を付けるわけですが、さすがに数も半端じゃないので名前のネタもつきるわけです。お菓子の名前、魚の名前、歴史上の人物、色の種類・・・そこにピックリな名前がありましたよ。それは『まちゃ』です。」に対し、まちゃまちは「ありがとうございます～～！！！」と、「そして、みごと『まちゃ』は里親さんが決まりました！！」と発表したらお笑いライブ？と思うほどの「おおおおお！！」と言う歓声と大拍手！！いや～嬉しかった～～♪  
え？2009年の話していないだろって？ここからですよ！

2009年の私の中の印象に残った出来事と言えば、ご覧になられた方も多いと思います、「NEWS JAPAN/時代のカルテ」の「命の現場シリーズ」のオンエアです。簡単に説明するならば「現在の犬問題の日本報道界初のつっ込んだ特集」と言ったことでしょうか。滝川クリステルさんはじめ、スタッフの方も良くやった！と言った感じです。プロデューサーさんに関してはクビ覚悟でやったんじゃないのかと。反響としては私と同じ気持ちであった方のほうが多いと思いますが、これが「何であんな残酷なシーンを・・・」と言う心無いクレームが大半をしめたらトップが責任を取らなくてはいけないですから。で、この滝川クリステルさんの企画きっかけで、各局、挙って「ペット業界の裏側」「保健所」「動物の命について」と結構際どい所まで取り上げる、ドキュメント、ニュース、討論番組などで放送してくれるようになりました。今までの番組では「触れてはいけない」と言う箇所が見え隠れする作りが多くたのもんね。そういう意味で「NEWS JAPAN」は「やっていいんだ。ここまで。」と言う切り札を作った番組と言っても過言ではないでしょう。（そして本当はみんなやりたかったんでしょうね）それが見事、影響を与えた動物の命に関心のなかった人たちにもその考えが一般化されつつある時代に変化して來ると思います。お笑いを見に来たお客様の、お笑い話ではないシーンでのまさかの歓声と拍手。これを感じた時「時代は変わりようがあるね。滝川クリステルさん！」と心から思いました。「2009年の印象」でもあり、「2009年のありがとう」でもあります。

## ノアのこと

**服部 貴康**  
1970年福知島生まれ。写真家、ジャーナリスト。大学時代より独学で写真を学び、週刊版カメラマンを経て、現在フリーで活動。01年、愛護センターに異動され、裏面を待つ子犬をテーマにした写真集『ただのいぬ。』(角川文庫)を発表。近著は『Do you have a home?』(ジュリアン)、「ただのいぬ。プロジェクト」主宰。

<http://www.tadano-inu.com/>

▼今から10年ほど前、雑誌の仕事ではじめて動物愛護センターを取材し、保護された犬たちと出会いました。そのことがきっかけで、愛護センターで新しい飼い主との出会いを持つ犬たちをテーマにした写真集『ただのいぬ。』が生まれ、写真展を初めとして様々な活動を展開するに至り、自分でもその広がりに驚いている次第です。

先日、神奈川県の逗子で活動するOne☆Pawさんからのお説明で、「ただのいぬ。展」のミニ展覧会を逗子文化プラザでおこないました。その際、東京の愛護団体によりセンターから保護され、新しい飼い主のもとで幸せに暮らす犬たちの写真を毎回展示しているので、久しぶりにその飼い主さんたちに連絡を取りました。電話で展示会の趣旨を説明しながら、いつも少し緊張しつつ勇気を出してたずねることができます。「わんこ、元気にしてますか？」なぜ、こんな当たり前の会話にちょっとした勇気が必要かと言うと、少し時間が経つと犬たちが亡くなっていることがあります。これは、犬たちの出自が関係しています。撮影した犬たちのほとんどが、「しっぽの会」で保護された犬たちと同様に、何らかの理由でセンターに保護され、収容期間を過ぎても元の飼い主が現れず、致死処分が決定した犬たちです。運良く保護団体に救い出してもらい新しい運命を歩いていたものの、そうした犬たちのほとんどがセンターに来る前は、家の外でつなぎっぱなしであったり、病気などの細かいケアをされていなかったり、ともすると飼い主から虐待を受けたりするケースがあります。中には繁殖犬として無理な繁殖を強要され、その能力が落ちたり病気になったりしてセンターに持ち込まれる場合もあるのです。ノアちゃんというゴールデンレトリバーの子がいました。おそらくは繁殖犬として使われ捨てられたのではないかという彼女は、センターに収容されたとき、両方の乳房ががんに冒されている



## 知ることから始まる

**稻垣 真紀**  
しっぽの会代表。幼いときから全ての生き物が大好き。保健所に棄てられ殺処分されている犬猫を見て心を痛めて2004年自己起業地に保護施設を作る。現在、スタッフ・ボランティアとともに精力的に活動中。

→て、余命1ヶ月ほどだったそうです。病氣のためどのボランティア団体にも素通りされていましたが、「あまりにも笑顔が愛くるしくて、どうしてもそのまま死なせてしまうことができなかつた」という理由で、幸運にもぼくが取材をしていた動物愛護団体を通じて救出されました。がんの摘出は無事に終わり、新しい飼い主として名乗り出た平澤明美さんの家族の一員として迎えられたのです。ぼくがノアと出会ったのはそうして平澤さんのお宅で暮らし始めて約半年後のことでした。やさしくて人懐っこいとても印象に残る子でした。

その1年後、用事があって平澤さんに連絡を取ったとき、ノアが亡くなったことを聞かされました。「せっかく皆さんに救ってもらったノアをお預かりしたのに、ほんの1年あまりで死なせてしまい申し訳ない」と電話口で話してくれました。ノアがセンターに来るまで、どんな扱いを受けていたのかわかりません。でも、病氣の治療も受けず用済みとして捨てられ、本当ならセンターで他の犬たちと一緒にガスで致死処分されるはずだったノア。わずかな期間でもこんなにも愛され、死して「申し訳ない」とまで言ってくれる人のもとで最後を過ごせたことは、彼女にとって本当に幸せだったのではないか。

保護犬を引き取ることは、病氣や犬の精神的なケア、余命も含め、彼らがそれまでに経験してきた過去のすべてを引き受けすることを意味します。ぼくの経験から言うと、保護犬の寿命は一般的によりも短いことが多いのです。それでも誰も知らない施設の中で命を絶たれるより、誰かの家の中で最期を看取られる方が、犬にとっても人間にとってもすてきなことではないかと思うのです。先日、写真展の報告で別のお宅に電話をし、レオンというワンコが亡くなったこと、そしてレオンにまつわる様々な思い出を聞きながらそんなことを考えたのでした。

▼毎日がめまぐるしく過ぎ去り色々な事がありすぎて、私自身も毎日が必死で昨日も終わってしまいました。皆様からのたくさんのご支援・ご協力のお陰で動物達の施設環境もずいぶん改善することが出来ました。環境設備に関しては現在も継続中です。少しづつではありますが、確実に着々と進められています。

昨年も札幌市動物管理センターに何度も通いましたが、いくつか疑問に感じたことがあります。ひとつは、一昨年前より貰われる子の数が増えていると感じますが、単純に喜べない事があります。それは、引き取り希望なら誰にでも簡単に犬猫を譲渡してしまうことです。それが若い純血種なら繁殖動物として繁殖場に流れることもあるえるわけです。そして、用済みになればまた簡単に捨てるのです。「家族に反対された・病氣だった・アレルギーが出た」などの身勝手な理由で、簡単にペットを捨てる飼い主も多くいます。全てが理由として納得することは出来ません。また、自分のペットが迷子で収容された場合、返還料と預った日数の食餌代がかかります。また、ブリーダーが繁殖犬をセンターに使い捨てる際も、無料で引き取り罰則もないでは矛盾していると思いませんか。こんな現状に気が付いている人がどれだけいるのでしょうか。センターは上からの指示で仕事をしていますが、一体誰がこのような事を決めているのか・・・しかし、この矛盾に気付いてない私達にも責任があると思います。「命を大事にしましょう」「飼ったら最期まで飼いましょう」・・・スローガンだけでは、なんとも説得力がありません。これでは動物達は救われません。今年は皆さんに、現実をぜひ知っていただきたい。そして、現実に目を背けずにたくさん的人に伝えてください。そこから救われる命が必ずあるはずです。小さな命が苦しんで殺されていく。同じ地球に住む命、人ごとではないはずです。必ず自分達に返って来ることを忘れてはいけないと思っています。

以前に比べ殺処分される犬猫の数は減少しているとはいえるが、日本では2008年、286,479匹の犬猫が行政殺処分されました。

(ALIVE調べ)一日に換算すると、784匹もの膨大な数の犬猫が人間の身勝手な行動の犠牲になりました。しっぽの会では、飼い主やブリーダーが犬猫を放棄する際には引き取り料を徴収して、その費用が収容されている犬猫のワクチン代など救命に使われるよう要望したいと思っています。